

私、十五歳の青春のまっただなか軍需工場へ通いました。通うのには乗物に乗らないで大抵歩いたように思いますが運動靴がなくて重い下駄をはいて魚の目が出たことが思い出されます。毎朝、家を出る時は親に本当の別れを告げるが如き思いで目と目は異様な思いでした。

お互いに出先で空襲にあって死ねば絶対に会えないのを、その時誰もが心していたからである。今はK工場になっているあの場所で、小さな女の子の手で、飛行機の翼の部品をつくるのに夢中だった私は、栄養失調で骨だらけにやせて、それが原因で体中吹出物が出来て現場から事務へまわされた。工場へ行く前に昔の本千葉駅のF外科へいき、頭の腫物の部分の髪をそって治療をしてもらいましたが、かさぶたの中は膿としらみがいて、それを看護婦さんはだまってとって薬をつけてくれました。今このことを思い出しますと、体中がじんましんのようにかゆくなります。これが終ると工場へ出て仕事をし、休むどころではありませんでした。あの時の学校の先生も友達も、みんな名前も顔も忘れてしまいました。そのうちに警報が出ますと工場の警備員の手をふりきって、蘇我より長洲まで歩いてというより、かけだして帰りました。その当時家には私の祖母、母、生れたばかりの弟がいて、うろたえている状態を思い出すと、自然にそのような行動に出てしまいました。弟はやはり栄養失調で戦争が終る前年8ヶ月でこの世を去りました。警報が解除になると、習慣で私はまたかけだして工場へいきましたが、今思い出しますと、それが自然にそうなるのが不思議でした。

現在の大人の勤人より、あの時の少女の私は何とすごいファイトであったのか、なにがそうさせたのか、その心はいまだわからない。その当時、退避がおそくて、海岸の防空壕へ入ろうとした時に直撃にあったり、機関銃でやられたりして、本当に生きるだの死ぬのだのを目の前でみて、非常に自分で自分を守るのに苦労した。

一回は森の中に逃げて、そこであの当時P公といった飛行機におわれて、竹やぶの中で銃撃にあったが、幸いにも生きのびた時の気持は今でも忘れられない。工場を終えて家へ帰ると食物は何もなく、夜になって親類のものが家を焼け出されたのできても、芋の粉をねって、こんろで焼いて食べたことを思い出した。あの時は困った人をみると、お互いだまって手をさしのべ、それが自然であった。今日では親類でも知人でも、全く困っていてもよそをみて相談にもものらないし、そんなこと誰のこととしか思えない。

或る時工場の壕へ入った時、私の体中の腫物が異様に痛いので気が狂いそうだったが、ぎゅっと歯をくいしばった時、壕の隅ですすり泣く誰かの声がした。あの時のすすり泣きの声が、今も寂しい夜の空から聞こえるときもある。

あの当時いつときも心のほっとした時はなく、24時間緊張の連続でよく気も狂わなかったと思う。昔にしかなかった大きい黒い自転車に乗って、西千葉と蘇我を往復した時、それは学校工場が出来た時のこと。部品を積んで今井町を自転車とんだが（今は年をとりでぶで自転車も乗れなくなった。）、途中でほりぬき井戸の

冷たい水をのみ、警報がでて猛スピードで工場へとんだときは、よく生きていたものだあとで夢のようで、手をつねってみたりした毎日だった。

工場のことはこの位にして、今は亡き母とリュックを背負ってお芋の買出しに行った時は、今では苦しいような懐かしいような思い出になってしまった。長洲から5キロか6キロ位の農家へ買出しに行ったが、なかなかお芋のようなものでもあまりなく、売ってくれなかった。道ばたの草をとって、体のためにと途中とってきてゆでて食べるが、塩あじもなく、ただおなかへ入れればよかった。今はただグルメとかハーブといった、おしゃれな料理が出来る時代を考えると本当に幸せいっぱいです。

話があちこちとなりましたが、44年経っても千葉の空襲にあった夢をみるのです。小さな電球に黒いカバーをして、空襲の時は消して、夜外の明るさをたよりに私は祖母、母、隣の今は亡きおばさん達をつれ、私はこれから兄の軍刀を工兵学校へ持ってゆく前なので、軍刀を持って他には何も持たず、今の千葉高の裏山へにげました。家には今は亡き父が残りました。丁度戦場の兵士の如くみんなの名前をよびさげびながら、照明弾・爆弾・焼夷弾の雨あられとふってくる中を、めちゃくちゃにかけだしたが、祖母は下駄でしたのであぶないのでぬがせました。あの恐ろしい弾が落ちてくる時は、サーサーという不気味な音でした。町の真中は真紅にもえて、何とも涙の出ようがありません。宵の内から始まった空襲は長く、明方になるまでかかりましたが、雨が降ってきたので命からがら坂を下りていくと私の家の隣まで焼けており、父がたくさん井戸水をかけたので、焼けなかったと言っていました。家が残ったのも父が生きていたのもよかったのに、ただ私は呆然として家の中へ入りました。小猫がいて顔がすくで真黒でした。家の周囲に大きな穴をあけた焼夷弾のかけらも、いつしかなくなりました。私は傷口が焼夷弾の油でおかしくなり、ついこの間まで寒くなるとたいへんな痛さでした。相当後になってから、父がよく火につまれないようにしながら家に水をかけてくれたなあと気付いたものの、その時は空襲空襲で自分ながら神経がおかしくなったのだなあと思いました。

今思うと、あの当時昼間工場で働き、その間空襲につつまれてよく今日まで頭も狂わず、私のみならずあの当時それに会った人は、人間としてよく生きてきたものだなあとつくづく感心しないではいられない。今日の心のいゝような悪いような、何ともいえない心の試練にあい、生きていることの不思議さえ感じられます。

戦争程いやな、いけないものはこの世にないでしょう。